

感情表現の論理構造を求めて 8—散文から韻文へ

A Search for the Mechanism of Expressions that Evoke Emotions through Words 8—On making verses of proses

岩垣 守彦

Morihiro Iwagaki

フリー

Freelance

Poets have various poetic techniques, but by surveying literary works, there is one basic technique common to all poets: they don't use words to express directly what they want to convey. They describe it indirectly so as to make readers accept it with emotional satisfaction. In other words, poets describe something to imply other things. I'm going to analyze poets' poetic ways of making verses of proses.

1. 読むという創作

普通、作者は自分に関する情報を参考にして読んでもらうことを期待しない。その意味で作品は作者の手を離れると同時に、同一符牒集団の有機的統合体となると考えることができる。読者はそれを何らかの理由で選択して咀嚼する。作品の符牒情報がそっくりそのまま読者の内的資源と一致するとは限らないが、符牒に対する集団の基本情報は同じである。「リンゴ」が「みかん」という情報にはならない。したがって、「読む」ということは、「選択された符牒情報と符牒配列」を基に「統合情報を創る」という作業である、言い換えると、それは、素材(経験・伝聞・想像など)を基に符牒で創造された符牒情報を、読者は分解して再創造するということである。それは、和歌・短歌とか俳句とかの韻文も含めて、一般に作品は、符牒の通常の使い方では伝えることのできないことを伝えようという意志と技巧の結果だからである。その意図的的技巧をリファテールは『詩の記号論』の中で「詩は間接的に事物を表現するということである。別な言い方をすれば、詩は何かを語ることによって別のことを意味している。」と述べている。最近では、若松英輔が『言葉の贈り物』の中で「人はしばしば、言葉では容易に表現し得ないことを書きたいと思ったりもする。むしろ、そうした思いに心が満たされたとき、書きたいと感じる。書くという営みが本当に起こるとき、それはもともと不可能な出来事への、無謀というべき挑戦なのかもしれない」(pp.44-45)と言っている。作品がそのように言葉で勝負を挑んでいるときに、他に助太刀を求めることは、作品に対して不実であるように感じられる。和歌・短歌・俳句などでは、提示された題をどれほど巧みに読み込むか競ったり、また、たとえば、「かきつばた」を句の先頭の音に読み込んで「唐衣 きつつなれにし つましあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ」(在原業平)と歌うとか、遊びが多分に含まれているように思われるが、ここでは、「選択された符牒と符牒配列」に言語情報の伝達論理を当てはめて応えるという方法を読みの手として加えてみようと思う。

2. 符牒の論理

作者が符牒に情報を込め、符牒配列に技巧を凝らしたのなら、読む側もそれに応じたい。そんな気持ちになったのは、大昔、主知主義風潮の1930年代のころ見いだされ編集された19世紀アメリカの女流詩人エミリー・ディッキンソンの詩集を読んだときだった。たとえば、次のような詩がある。

I died for Beauty—but was scarce
Adjusted in the Tomb
When one who died for Truth, was lain
In an adjoining Room—

He questioned softly “Why I failed?”
“For beauty”, I replied—
“And I—for truth—Themselves are One—
We Brethren are”, He said—

And so, as Kinsmen, met a Night—
We talked between the Rooms—
Until the Moss had reached our lips—
And covered up—our names—

教会の裏などに回ると、誰も訪れなくなった墓の墓石が横積みになっているのをよく見かけるが、この詩では、墓を訪れる人も絶え、忘れられていく状況を、墓石に苔が生えてきて、下から少しずつ昇って墓石の名前を覆い尽くしていくという絵(というより動画かな)で表していて、名前が消えたとき、それが死んだということと、美も真も普遍ではなく有限なのだというメッセージを投げているのだと読んだ。

このように英語の詩は理屈っぽい。それはロマンティズム(渡辺一夫や松村達雄は「熱狂と理性」と説明している)の詩人においても同じである。ワーズワースは「虹」(My heart leaps up when I behold)という詩で自然との共鳴・共生を願いながら、The Child is father of the Man(大人を造っているのは子供の心なんだ。)という理屈を加えている。いずれにせよ、符牒情報と符牒配列の論理に基づいて絵[動画]を想い描くこと、それが読むということなんだと感じた。以来、選択された符牒情報と符

牒配列を情報の伝達論理で分解して再構築することが面白くて、そのような勝手読みを意識的に試み、それを音楽や絵・映画にも広げて、勝手聴き・勝手観を愉しんでいる。そして、マリオ・ブルネロのチェロを見つけ、上原ひろみのピアノを見つけ、映画『耀ける青春』をみつけた。それは、シクラメンが買われて二三年たってから、いかにもその花らしく咲いて自然を楽しむように、ごく自然に自分のものとなる喜びであった。

ところで、エミリー・ディキンソンやワーズワースの符牒選択と符牒配列の理屈っぽさの基礎には、言語情報の伝達の際に無意識に作用する事象の展開が関係している。人間は他人を説得するために次のように動詞を少なくとも三つ使う。

理由・原因(状態・動作)

↓

随伴動作

↓

随伴結果(状態・動作)

これは人類共通の「情報伝達の規則(説得の論理)」である。一度にすべての要素が現れるとは限らないが、これが納得の規則である。つまり、ある理由があって動作したらある結果が生じたということである。

日本の和歌・短歌もこの規則に従っていて、十分に理屈っぽく感じられる、もう何年も前のことになるが、阿部明典氏(現・千葉大)が、百人一首をばらして、コンピュータにランダムに選ばせて和歌を再生させたことがあった。多くは意味をなさない組み合わせになったが、中には面白い組み合わせになっているものもあった。そのとき、和歌・短歌の多くは、かなり単純な論理的組み合わせなので、別のやり方もあるのではないかな・・・とぼんやり考えるだけだった。それから、物語の展開を因果関係の動詞列としてとらえると、共感的納得(emotional satisfaction)はどのように喚起すればよいかを考えることになり、符牒数の少ない割に理屈っぽい和歌・短歌の感情喚起のメカニズムを探ることになった。たとえば、平明で美しい絵[動画]を脳内に描かせる若山牧水の

白鳥はかな[哀]しからずや空の青海のあをにも染まずただよふを例にしてみよう。

世間では、この歌を牧水の(安房での女との)実生活と重ねたり、白鳥(白)と空(青)・海(碧)の対比から「孤独・孤高」を表すととらえている。それも読みの一つであるが、「選択された符牒と符牒配列」に言語情報の伝達論理だけを当てはめて読むとどうなるかということである。説得の論理を当てはめると

理由[白く生まれついた](から)

↓

動作[白鳥は空の青海のあをにも染まない(でただよ)]

↓

結果[]

となる。随伴結果は読み手が勝手に入れることになる。勝手に随伴結果を加えて散文化すると、たとえば、

白く生まれた。その結果、標的になりやすく[目立つ]ことになった。

となる。そして、この歌は、それは【かなし[哀]しくないだろうか】(疑問)、あるいは、【かなし[哀]くはないのだろうか】(反語)とが結びついている。和歌・短歌は、「虚構の私」も含めて「私」が感慨を吐露するものである。牧水が技巧を凝らして短歌(韻文)にした結果、この歌から「かなし[哀]いけど、白は白なんだから際だっても仕方が無い」という「悲壮快感」が感じられる。なお、この歌は処女歌集『海の声』(明治41年)では「かなし」であるが、『別離』(明治43年)では「哀し」になっている。牧水は「かなし」と等時間隔に読むのではなく、また「悲し」(つらい)でもなく、「哀し」(身にしみていとおいしい)と一気に読むことを期待しているようにも感じられる。

もう一つ例を出して、言語情報の論理だけを当てはめて読むことの合目的性を示したい。

寺山修司のかなり有名な短歌に

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

がある、この歌も、巻末の解説を読んだり、参考資料や解説書を調べたりした読み方がたくさんある。たとえば、

[作者]

寺山修司(1935-1983) 歌人・俳人・詩人・小説家・映画監督・戯曲家・演出家。青森県三沢市生まれ。10歳のころ青森大空襲に遭う。また、父親を太平洋戦争で亡くす。小学4年の時に終戦を迎える。18歳で短歌研究新人賞を受賞。塚本邦雄らと青年歌人会議を組織、前衛短歌運動の一翼を担う。歌集『空には本』『血と麦』『田園に死す』『テーブルの上の荒野』など。

このくらい作者に関する情報が加わると、[歌意]は次のようになる。

[歌意]

1. 青年は、霧深い海に向かってマッチを擦った。そのとき、青年に「問い」が浮かんでくる。——自分には命を賭けるものがあるだろうか。このとき青年は自分の生き方の根本を問う。海を覆う霧は一瞬、ほんの目の前だけが明るくなる。(佐々木幸綱監修『声に出して味わう日本の名短歌100選』(2004/03/3 中経出版))

2. 夜に近い夕暮の暗い波止場。(ロングコートを着た若い)男が独り海を見つめている。煙草をくわえてマッチに火を付ける。マッチの火に照らされて深く立ち込めている霧が浮かび上がる。命を捧げて守るに値するほどの祖国はあるのか。

3. 「マッチを擦る」と、つかのま炎をたてる。その一瞬の輝きははかない。まるで人間の命のように。そんなはかない我々に身を捨てて守るほどの祖国があるのだろうか。「海に霧深し」は実写であれば波止場のようなところで、作者はタバコを吸うべくマッチを擦ったのだろう、海はたまたま霧が深くあたりが見えない状態だったのだろうが、「霧深し」は何か不透明な感じである。そして、それは、祖国の不透明感をあらわしているように感じられる。戦後個人主義思想が若者の間に浸透し、それは同時に個人のおやうさ、はかなさを自覚させた。また同時に祖国というものに不透明感を覚えさせた。そういう戦後の若者の戦前とは違った祖国への思いを代表して、「身捨つるほどの祖国ありや」と叫んでいるようである。

4. 寺山修司にはくわえタバコで少しはにかんだような写真がよくあります。「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし」はきつと霧のかかる海を眺めながら一服しようとしたのでしょう。孤独と不安を感じ、自分が何者か確かめたい欲求は、青年期には誰もが体験する。そこで突然沸き上がった思いが「身捨つるほどの祖国はありや」という表現になったのだと思います。身を捨てるほどの情熱を傾けるものよ、現れてくれ・・・！という彼の心の叫びだと、若い私は思っていました。

5. マッチを擦るとつかのまの一瞬、ぽっと明るくなります。汽船のデッキの上で周りが一瞬明るくなり、海に霧が深く出ているのが見えたのです。戦時の傷跡が深く残っている時代で、親兄弟も国のために戦争で死んでいき、自分は生き残っている。自分の生命を賭してまで戦うべき祖国はここにあるのだろうか、夜の霧の中で強く感じたのです。

[鑑賞]

この歌は、1957年に出版された作品集『われに五月を』の「祖国喪失」と題された一連に収録され、さらに翌年出版された歌集『空には本』にも収録されたが、富沢赤黄男の俳句「一本のマッチすれば湖は霧」を踏まえた「本歌取り」、オマージュ、つまり、パクリ。歌人が「身捨つるほどの祖国」と歌う背景には、10歳のころ青森大空襲で被災した戦争の記憶と、太平洋戦争において、大日本帝国のために死んでいった上の世代の姿がある。たとえば、寺山の父親は戦争の末期にインドネシアのセレス島で死んだ。

この作品が発表された当時の日本は、敗戦から立ち直って復興に向けて走り始め、人々は国家の軛から解放されて自由を謳歌し、高度経済成長期に突入したが、同時に、その明るさの中で、信じるべき理念を失った不安や空しさが内側から精神を蝕みはじめていて、一部の敏感な精神は足元に忍び寄る虚無の影を確かに見えていた。霧に閉ざされた海のイメージは、当時の社会に広がり始めた不安や空しさを象徴している。また、「身捨つるほどの祖国ありや」という切迫した問いかけには、祖国ばかりか、命をかけて信じるほどのものは何もない不安定な気分を読み取ることができる。

作品に作者・時代を加味すると、だいたいこのような読み(「歌意」と「鑑賞」)が出来る。しかし、言語情報の論理で読むと、事象部分は

マッチを擦った理由→タバコを吸うため
タバコを吸う理由→時間[手]が空いたから
時間[手]が空いた理由→出航できないから
出航できない理由→霧が深いから

という因果関係からできていて、それを散文で纏めると

霧が深く、出航待機になった。それで、時間[手]が空いたので、タバコを吸いにデッキにでた。マッチを擦ると、一瞬の光に深い霧が映った。なるほど、霧が深い。

となる。巷には寺山修司の人物像と重ねて、

暗い波止場。ロングコートを着た若い男が独り海を見つめている。煙草をくわえてマッチに火を付ける。マッチの火に照らされて深く立ち込めている霧が浮かび上がる。

と、ムード歌謡・映画の一場面のような状況を想像する人もいる。が、足を踏み外して海に落ちるかもしれない深い霧の夜にタバコを吸いに波止場に行く理由がわからない。

ところで、上の句[マッチ擦るつかのま海に霧ふかし]と下の句[身捨つるほどの祖国はありや]の関係であるが、和歌・短歌は「客観的事象描写＋主観的感慨・感想」という組み合わせが普通である。先に使った牧水の「白鳥・・・」の歌も

客観的事象描写[白鳥は空の青海のあをにも染まずただよふ]
＋
主観的感慨【かなし[哀し]からずや】

となっている。このような組み合わせは和歌・短歌では普通である。たとえば、

あかねさす紫野行き標野行き君が袖振る
久方の光のどけき春の日に花の散るらん
東海の小島の磯の白砂に蟹とたわむる
柔肌の熱き血潮に触れもみで道を説く君

という事象に、作者は7音で感慨(【】内)を加えて歌にする。

あかねさす紫野行き標野行き【野守は見ずや】君が袖振る
久方の光のどけき春の日に【しずこころなく】花の散るらん
東海の小島の磯の白砂に【我泣きぬれて】蟹とたわむる
柔肌の熱き血潮に触れもみで【寂しからずや】道を説く君

のように。さらに、昔の和歌にもあるが、最近の流行は、上の句(575)で事象(状況・情景など)を描き、下の句(77)に感慨(感想・主張など)を置くのが一つのパターンになっている。たとえば、

「この味がいいね」と君が言ったから＋【7月6日はサラダ記念日】

のように。ここで取り上げた寺山修司の「マッチ擦る・・・」の歌も

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし＋【身捨つるほどの祖国はありや】

のようにになっている。

それで、上の句の事象[マッチ擦るつかのま海に霧ふかし]と下の句の感慨[身捨つるほどの祖国はありや]との結びつきから、何が感じられるかがポイントであるが、「燃える火」はよく「人生」と擬えられる。たとえば、シェイクスピアは‘Out, out brief candle! Life’s but a walking shadow.(消える、消える、短いロウソクよ。人生は歩く影にすぎない、)’というセリフを書いている。「つかの間の燃える火」と「命の火」とが隠れた共通項と考えられる。「祖国」が「つかの間の命の火を消しかねないもの」となる。そうすると[歌意]は、散文化すると、

霧が深く出航待機となったので、タバコを吸うためにデッキに出て、マッチを擦った。一瞬の光に深い霧が映った。命の火を燃やしたい者がその火を消してしまうに値するほどの祖国【もの】がはたしてあるのだろうか。

になる。霧が深く出て出航待機となったので煙草を吸うためにデッキに出た者は「青年」かもしれない。あるいは、若い学徒を船倉に詰め込んで南方に下る輸送船の船長かもしれない。この読みでは、ロングコートも、波止場も、啞え煙草も出てこない。が、短歌という技巧で「憧憬的絶望」の感情が喚起される感じがする。

このように見てくると、韻文(ここでは和歌・短歌・俳句とする)は日本語集団の言語的趣向(五音と七音の韻律嗜好)を基礎にした

【理性(理知)の世界】→[事象フレーム](7音抜き客観事象;57音客観事象)

+

【感情(情念)の世界】→【感慨フレーム】(7音感情・感慨;77音感情・感慨)

という理知的説得と共感的共鳴を喚起する完全形式で、作者情報や制作時代情報など、むしろ不要のようである。そして、俳句(575)は、いかに感情・感慨(7あるいは77)を抜いて共感的共鳴を喚起させるか「捨る」ことになろうか。

参考文献

Borges, Jorge Luis (2000): This Craft of Verse, Harvard University Press, Cambridge(鼓直訳『ボルヘス、文学を語る——詩的なものをめぐって』(岩波書店 2002)[第1著者姓 年] 著者名: 論文タイトル, 雑誌名, 出版社, 発行年.

Riffaterre, Michael (1978) Semiotics of Poetry. Indiana University Press(齊藤兆史訳『詩の記号論』(勁草書房 2000)

井上宗雄編『和歌の解釈と鑑賞事典』(旺文社 1979/04/01)

岩垣守彦「「勝手読み」について」(認知科学会ワークショップ, 同志社田辺キャンパス 2008/09/05)

岩垣守彦「感情表現の論理構造を求めて」(「思考と言語」研究会・早稲田大学 2013/10/19)

岩垣守彦「日本語の「は」と中原中也の「一つのメルヘン」」(認知科学会・オーガナイズドセッション・千葉大 20150918)

岡井隆・金子兜太『短詩型文学論』(紀伊國屋書店 1963/07/31)

岡井隆『韻律とモチーフ』(大和書房 1977/04/25)

来嶋靖生『短歌の技法』(飯塚書店 2003/01/10)

佐佐木幸綱監修『日本の名歌100選』(中経出版 2004/03/30)

馬場あき子『韻律から短歌の本質を問う』(岩波書店 1999/06/25)

寺山修司『海に霧—寺山修司短歌俳句集』(集英社文庫, 集英社 1993/03/25)

若松英輔『言葉の贈り物』(亜紀書房 2016/11/18)

なお、寺山修司の「マッチ擦る・・・」に関して、通常の歌意・鑑賞を創るために参照させていただいたインターネットのサイトは次の通りである。感謝。

<http://d.hatena.ne.jp/kenshiro55>

<http://tapanulifever.hatenablog.com>

<http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp>,

<http://blogs.yahoo.co.jp/jintoku510>

<http://oshiete.goo.ne.jp>,

<http://msk333.exblog.jp>,

<http://100ya.isis.ne.jp>